

自律的学習の技能習得と時間増加を目標とした 薬学部英語教育における多読活動 導入・経緯・課題

増田 由佳*

*東京薬科大学
masda@toyaku.ac.jp

要旨

薬学部の需要に合う英語技能向上方略として、自律学習の技能習得と時間増加を目標に、2017年度初頭に多読活動を導入した。本稿はその理論的背景・実施内容・2018年10月現在の成果とその分析・そこから明らかになった今後の課題を報告する。図書館の協力や学内助成金の恩恵を得て多読教材の整備を進めると同時に、1年次必修講座(多読群)では、1年間の試験期間を経て、課外多読課題や授業中の速読訓練を開始した。課外課題は成績評価の対象とした。また全学的な多読活動の提案を行った。その結果、学部全体の月平均貸出冊数は、多読導入前($M=4.5$)と比較して導入後($M=283.6$)で顕著に伸びたが、貸出冊数の91%は多読群が占めていた。多読群を中心に多読による自律学習量は大きく増加したが、今後はさらに全学的な理解を深めて入学から卒業までの継続的な学習を奨励する環境の整備が必要であることが明らかになった。

キーワード：多読、自律的学習、速読、薬学部、第二言語学習

1. 薬学部英語教育における現状

薬学部における英語学習の特徴として、以下が挙げられる。専門分野の論理解読などの高度な英語技能が求められることと、その反面、カリキュラムの性質から英語の授業時間に大きな制限があることの2点である。

上記の2点は大学英語教育が共通して持つ課題とも言えるが、薬学部ではその制限が特に大きい。まず英語の授業時間に関しては、最多の場合で週に2~3時間、専門科目の実習期間では実質的に皆無の期間も続く。授業時間割は9時10分に開始し5時50分に終了するが、この中で必修講座が占める割合が非常に高く、学年によってはこれに7時間目が加わる。すなわち、授業時間のみならず、課外学習の時間も大幅に制限される。

以上のように、薬学部の英語教育では、少ない学習時間を活用して最大限の学習効果を得ることが求められる。当然ながら、授業時間を増やすことは選択肢にはなり得ない。そのため、限られた課外時間内で、英語の学習時間が占める割合を最大限に増やし、かつその学習効果を高めることが、最善の解決策と考えられる。

1.1 自律的学習

そこで目を付けたのが、自律的学習である。Holec

(1981)によると、自律的学習とは自己の学習全体を自分の責任として捉えることである。つまり、自律的学習は、学習者中心の視点から見た学習へのアプローチとも言える。そのような学習は、単に課題が出たから、先生に言われたから、という消極的な学習とは決定的に異なる。

自律的学習者は、学習方略を始めとした様々な学習の側面を、ある程度理解したうえで選定・実践する。そのような学習技能の獲得が、必ずしも偶発的・自然発生的に起こるとは考えにくい。むしろ、指導者は自律的学習にかかわる学習技能を積極的に指導し、学習環境を整えるべきであろう。すなわち、自律的学習のための環境整備やその技能の指導が必要とされる。

1.2 多読による自律的学習

自律的学習を通して習得できる技能には様々なものがあるだろう。しかし、上述のように学生の課外時間にも制限がある。そこで、習熟度向上のためにどうしても欠かせない、最低限の技能に絞る方が得策と考え、「語彙の習得」と「流暢さの訓練」の2つの目標に絞ることにした。そして、これらを習得するための学習活動として、多読を選定した。

まず「語彙習得」に関して、多読が効果を持つことは長く知られている(Cho & Krashen, 1994, Coady, 1997b など)。内容が充実していて楽しめ、意義がありかつ理

解できる学習活動の方が、学習効果が高い(Coady, 1997a)ことを考え合わせると、多読は理想的な学習法と思われる。

また、多読は本来、母語話者におけるような偶発学習(Nagy & Herman, 1985)に近い。これを説明する適切な例として、辞書を使わずに楽しく読む作業がある。すなわち、多読を適切に実施すれば、語彙と同時に実践を通した「流暢さの訓練」を行うことができる。

1.3 学習カリキュラムの視点からの多読活動

さらに、言語学習のカリキュラムには、興味がわいて理解できる内容の学習活動が、読む・聞くの受動的技能においてふんだんに必要であると言われる(Nation & Macalister, 2010)。多読活動はまさにこのような学習活動であり、Nation & Macalister (2010, p.52)の引用するElley and Mangubhai (1981)の例では、多読を取り入れたクラスでは、取り入れないクラスと比較して 8 ヶ月間で 15 ヶ月分の学習を観察した。

同様に、英語教育で広く重視される four strands (4 要素) の考え方(Nation, 2001; Nation & Macalister, 2010)では、4 つの要素が学習にバランス良く取り入れられることを提唱する。その要素とは、1. meaning-focused input, 2. language-focused learning, 3. meaning-focused output, 4. fluency activities であるが、このうちの 2 つ、1. と 4. は多読に相当する。

1.4 薬学部英語教育における方略

上のような理由から、大学英語教育全般はもちろんだが、なかでも薬学部の学習環境と需要に合う対策として、多読活動を導入・実践した。実施は、当学への筆者着任時、2017 年度初頭に開始した。次にその活動の導入と経緯を報告する。

2. 多読活動の導入と経緯

2.1 教材整備

言語学習の教材に関しては、語句の、使用もしくは出現の頻度を考慮した、authentic な素材が望ましい。具体的には、特に頻度が高く基幹語彙として分類される、2000 程度の word families (Nation, 2001)を中心に、頻度の高いものから効率よく語彙を習得することが理想であろう。この目的のためには、コーパス言語学の知見を利用して作成された多読教材が最適であると考え、このような理論に基づいた教材を作成する各主要出版社に依頼して、教材カタログを入手した。

次に、上にも少し触れたが、語彙その他の偶発学習を期待する場合、教材のレベルが学習者にとって適切であることが鍵となる。初年度は特に予算が限られていたため、多読を授業に導入する予定であった新 1 年次生の習熟度と、筆者の個人的経験から学生への人気を考慮して、入手したカタログから教材を選定して購入希望リストを作成し、図書館に購入を依頼した。

その後、生命科学部からの寛大な寄贈や、2018 年度には学内の教育改革推進事業による助成を得て、高学年にも対応できるよう幅広い語彙レベルの図書や音声・オンライン教材を加えていった。その結果、合計 2600 冊程度を揃えることができた(2018 年 12 月集計)。

2.2 授業への導入と実践

1 年次生必修英語の全クラスで実施することを最終目標として、授業への段階的な導入を開始した。以下、この 1 年次必修英語受講者を便宜上「多読群」と呼ぶ。

初年度は筆者の担当するクラスのみで試験的に導入した。講座はコミュニケーション技能の習得を目標としており、授業形態は task-based であった。成績評価は、音声入力や発話、作文、多読等の項目毎に、継続評価を行った。多読課題導入初期は所蔵図書の量に制限があったため、目標語数は少なめに設定(前期 5000 語、後期 8000 語)し、これらの目標語数を多読項目の満点として評価した。具体的な読了語数の管理方法は 2.5~2.6 に論ずる。

初年度中には他にも、翌年の全クラスでの本格的な実施への準備として、多読群講座担当教諭各位に説明を行い、理解や了承を得ると同時に、学部内の英語教諭各位にも活動内容の説明を行い、理解と協力を求めた。

このような過程を経て、翌年の 2018 年度初頭から、1 年次必修英語全クラス、筆者含めて全 5 名の担当教員により、本格的に多読を実施した。目標読了語数は、課外学習時間が少ないことや、英語・日本語にかかわらず近年の学生に読書習慣がないことも考慮して、やはり少なめに設定した(前期 15000 語、後期 30000 語)。

2.3 指導上の留意点

導入時にはまず授業中に教室で多読方法を説明し、学生は課外時間に各自図書館で多読用図書を選び読み進めた。その際、多読の学習効果を高めるために、次の点を特に留意した。

上述したように、多読の学習効果は、学習者が内容を理解しながら学習を楽しめることや、母語話者において偶発学習が起こる環境への類似が起因すると考えられる。すなわち、学習効果を高めるためには、そのような学習環境が条件となる。その学習環境とは、具体的には、辞書を使わずに楽しく読める難易度(Nation, 2001)の多読用図書を、学習者が自主的に選ぶ(Reeve, Jang, Carrell, Jeon, & Barch, 2004)ことであると考えた。ところが、国内の学生および教員は伝統的に、deliberate, language-focused learning 以外の学習経験に乏しい。そのため、授業では特にこの点を意識して指示を与え、その指示は複数回繰り返した。

2.4 導入法

指導の方法としては、可能な限り講座開始時における実演が望ましい。授業終了前の時間を利用して図書

館に移動した上、教材を手に取りながら説明し、その場で学生に図書を選定を促すのである。この方法は筆者の前任校で数年来実施したもので、その効果は経験的に実感している。しかし薬学部の場合、授業時間が70分と短いため、教室での説明のみとした。この点に関しては後に考察する。

2.5 読了語数の管理（レポート）

初年度は、フォーマット化したレポートと M-reader の併用により読了語数を記録・管理した。

レポートは、英語の設問に答えて読書速度(wpm)や新出語句、粗筋、好きな登場人物と理由、次に読みたい本を書き込んでいくもの（付録参照）で、過去数年間使用した結果は良好なものである。

学生が設問に解答する際の言語は日本語でも英語でも良い。その理由は、多読課題は読みの流暢さと語彙獲得が目的なので、英語での産出を強いるとポイントがずれ、却って学習効果を下げる可能性が考えられるためである。ただし、この方法では、多読を重ねるにつれ、学生が自主的に英語で解答することが増えていくことを付け加えておく。

問題は、この方法では回収したレポートの記録を教員側が管理するための時間と手間が大きいことである。そのため、複数の担当教員が担当する講座での使用は、必ずしも現実的ではない。

2.6 読了語数の管理（M-reader）

一方、M-reader を初めとしたオンライン・システムは、教員の負担が比較的少ない。例えば M-reader では、学生が読み終わった本の内容理解を問うクイズに一定の割合以上で正答すると、読了語数が自動的に記録される。また、カンニング防止機能なども充実している。このように、初期設定さえ行えば、教員の負担を大幅に緩和できることが魅力である。そのため、2018年度に多読群全体で実施する際に担当教員の負担緩和の目的で、これも2017年度の試験的使用を経て導入した。実際の導入時には、各教員でIT技能に差があることを考慮して、紙媒体のレポートとの併用を可能としたが、結果的には全教員が M-reader の使用を選択した。

2.7 「速読」訓練

ここでいう、多読の文脈における速読は、興味ある文章を理解しながらできるだけ速い速度で読む訓練を指す。速読1つにしても、異なる目標を持つ様々な訓練法があるが、その中の silent repeated reading にあたる (Nation, 2009, p.69)。読みの流暢さを訓練する目標で、授業内活動として行った。成績評価の対象とはしなかった。

具体的な方法は Quinn, Nation, & Millet (2007) に詳しいが、手順に多少変更箇所があるため以下に記す。学生は各自読み進めている多読用図書を教室に持参する。教員は教室用タイマーを利用して3分計り、学生はそ

の間、既に読み終わった箇所の記事を、内容が理解できる最速の速さで読む。その後、読了語数を概算する。これは、1行当たりの平均的な語数を、読み終わった行数で乗算するとたやすい。更に、その読了語数を3で割り、1分当たりの平均的読書速度(wpm)を算出する。各自、この読了語数と読み速度をノートなどに記録して管理し、長期間の変化や成長を観察する。

速読も、まずは多読群の一部、筆者の担当クラスで、2018年度後期に試験的に導入したのち、同後期中に多読群全体で実施を奨励した。2019年度からは多読群全体で正式に取り込むことを計画している。

速読に関しては予想外の効果を観察したため、後述する。

2.8 高学年クラスでの多読導入

上述したように、教材整備は当学の教育改革推進事業の助成金を得て大幅に進んだ。その受給申請にあたって、学内英語教員から高学年の多読促進のための具体的な方法の提案があり、プロジェクトがますます充実したことに言及しておきたい。当学薬学部学生は、4年次から卒業論文作成のために各「教室」に所属し、卒論研究の他に英語の指導もそこで受ける。これは、卒論執筆においては、各教室によって異なる高度に専門的な内容を、英語の原著論文を通して理解する技能が求められることを考えれば、理にかなった適切な形態であると言えるが、同時に、指導者にとっては大きな負担であると考えられる。そこで、これらの授業に多読を取り入れることによって、教員の負担軽減と学生の英語技能の向上の効果が期待できる。そこで教育改革推進事業においてこれを提案した。

3. 結果

薬学部の英語教育の主要な最終目標として、英語習熟度の向上がある。その目標到達のために、自律的学習の質と量を向上させることが、多読の目的であると言える。そう考えると、多読活動の成果を検証するにあたって、次のような方法が考えられる。まずは自律的学習の質や量における向上、次に習熟度の向上を、多読導入前後で比較することである。

本稿では、自律的学習量の変化を2つの方法で検証した。図書館の貸出冊数分析と、多読群の読了語数である。

習熟度向上の検証に最適なものは、多読導入前後における習熟度テストの得点であろう。当学の新生が例年6月頃に受験する習熟度テストとして TOEIC IP がある。TOEIC は洗練された統計処理その他の手法を利用し、テスト間安定性その他の面で信頼性が高いため、効果的な検証法ではあるが、学内の事情からデータの利用が不可能であったため断念した。

そこで、習熟度の向上と、自律的学習の質に関しては、本稿執筆と同時に進行中である質問紙による調査から可能な限り報告すると同時に、今後の課題として

分析を更に深めたい。

3.1 自律的学習量の変化

学習量のデータとして、多読用図書の貸出冊数と多読群クラスの読了語数を分析した。多読群であるなしにかかわらず、現時点では全ての学生は多読を課外で行うため、図書の貸出冊数の変化はそのまま自律学習量の変化と解釈できる。注意すべきは、貸出冊数には、借りたものの読了しなかった図書も含まれると推察される。そのため、読了しなければ記録されない、多読群の読了語数と合わせて考察する。

3.2 多読用図書貸出冊数

表1は、2017年4月1日～2017年10月16日の、全薬学部生による貸出冊数を月毎にまとめたものである。このうち、多読用図書の本格的な入荷が2017年6月に始まったことと、最終月の集計が1ヶ月分に満たないことから、2017年4月～2016年5月分を多読以前、2017年6月～2018年9月分を多読以降として分析した。

表1. 薬学部学生による多読用図書貸出冊数

2017年度												
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
冊数	5	4	74	76	0	25	82	90	98	42	31	41
2018年度												
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
冊数	538	1261	1410	267	10	522	(406)	-	-	-	-	-

3.3 学部全体の貸出冊数

分析対象月(2017年4月～2018年9月)における全薬学部生(1～6年次, $N=2700$ 名とする)による貸出冊数の合計は $N=4546$ であった。多読以前におけるひと月あたりの貸出冊数は、最小値 $Minimum=0$ 、最大値 $Maximum=5$ 、平均 $M=4.5$ であり、多読以降では、最小値 $Minimum=0$ 、最大値 $Maximum=1410$ 、平均 $M=283.6$ であった。学生一人あたりの貸出冊数では、月平均値は多読導入前で $M=0.0$ 、導入後で $M=0.1$ であった。

多読導入前後の貸出冊数の比較を行ったところ、有意な差が見られた($t(15.001)=-2.512, p=.024$)。

3.4 多読群の貸出冊数

多読群(1年次必修英語講座受講者, $N=450$ とする)による貸出冊数の合計は、全学部生の91%を占め、群を抜いて多かったため、以下に、多読群のみを対象とした分析を報告する。まず、全貸出冊数は $N=4135$ で、全て多読導入後の貸出であった。ひと月あたりの平均貸出冊数では、多読導入前は $M=0$ 、導入後は $M=258.4$ であった。多読導入前後の比較では、この差は有意であった($t(15.000)=-2.380, p=.031$)。

一人あたりの換算では、導入前 $M=0$ 、導入後 $M=0.6$ で、導入後は各学生が平均して3ヶ月に1冊程度借

りたことになる(長期休暇含む)。また、多読群全体で本格的な多読を開始した2018年度になると、多読群の月平均貸出冊数は $M=629.3$ となり、一人当たり1ヶ月に1.4冊借りたことになる(対象4～9月、長期休暇含む)。

3.5 多読群の読了語数

完結している直近の学期である、2018年度前期の読了語数を報告する。上にも触れたが評価は、発話・多読などの細目を設けて、それぞれで継続評価とした。その細目の一つである多読では15,000語の読了を満点とした。評価方法は全て開講時から学生に開示した。

2018年前期の多読群中、M-readerに記録を残した $N=449$ 名による読了語数は、最大 $Maximum=182941$ で満点レベルの15000語のおよそ10倍以上、平均値 $M=28887.2$ も、やはり満点レベルの15000語を10,000語以上超過した。最小値は $Minimum=0$ で、教育的配慮から明示は避けるが合計5名以下であった。標準偏差値は $SD=19541.3$ で、平均値からやや遠い近いことからわかるように、読了語数は学生によって大きく異なった。

その読了者数の分布を表2に示す。読了した語数の分類は恣意的なものであることを注意しておく。これは、満点レベルの15,000語を中心に分散の状況を見るためである。満点レベル未満が57名、満点レベル以上が392名であった。読了者数の過半数以上である344名は20,000語～5万語に分布していた。

表2 多読群の語数別読了者数 (2018年前期)

語数	0	～5千	～1万	～15千	～2万	～3万	～5万	～10万	～20万	20万～
読了者数	≤5	15	17	21	116	113	115	48	4	0

3.6 質問紙による内省

多読活動の実態を学習者の内省から把握するため、多読群を対象に、2019年1月9日～3月1日を回答期限として質問紙調査を行った。本稿執筆時点では回答期限の途中であるが、ここでは予備的に、2月21日までのデータの中から本稿にかかわる箇所を簡単に報告する。

まず、多読による効果があったかどうかという質問では、5の「とても効果があった」から1の「全く効果はなかった」という選択肢を設けた。表3は回答者数、およびそれが全回答者数181名に対して占める割合を表わす。この内省からは、効果があったと考える回答者の数が、効果が全くなかったと考える回答者数を大きく上回っていることがわかる。

表3 多読の効果に関する内省データ (2019.02.21現在)

効果	5	4	3	2	1
	とてもあった				全くなかった
回答者数	7	53	81	28	13
%	4	29	45	15	7

次に、効果を実感した技能についての質問では、複数回答としたが、10%以上の回答率があったのは全て、4技能のうち読みの下位技能であった。すなわち、内容理解が39%と最も多く、次に速度23%、語彙13%、自信10%となった。

3.7 速読の効果

上述したように、この講座はコミュニケーション技能の習得を目的とし、継続評価を行う。発話技能は fluency, accuracy, vocabulary, pronunciation の4項目の下位技能に分け、毎週の授業で評価・記録する。「速読」を毎授業行うようになって3週間程度が経過した時点で、その発話の流暢さに突然の向上を観察した。具体的には、語句と語句の間の pause が減少し、なめらかに繋がった発話が多く多くの学生で見られた。そしてこの上達は、暫時的と言うよりも、突発的に観察され始めた印象を受けた。同時に、語彙技能にも明らかな向上が観察された。

4. 考察

4.1 自律的学習の達成度

上にも触れたが、貸出冊数が必ずしも読書量を示すとは限らない。とはいえ、控えめに考えても、まず図書館に足を運び、実際に多読用図書を手にとって、貸し出しの手続きを取った上で一定期間手元に置いていることは間違いない。これは英語もしくは多読学習への積極的な興味や関心を示すだろう。さらに踏み込んで、このうちの8割が貸し出した本の内容を一定量以上読み、1冊につき20分を費やした($4546 \times 0.8 \times 20 = 72736$)と仮定すると、合計72736分、約1212時間の自律的学習時間が投入されたことになる。

一方、読了語数に関しては、大多数の学生が要求された以上の読書量をこなしていた。はじめに述べたように、薬学部では授業時間が多いことを考え合わせると、必要最低限以上の達成率は注目に値する。

読了語数は1冊読了しなければ記録されないため、語数のみに注目して本を選んだ場合、15000語を多少超えたところで多読を終了するケースが多いと予想できる。しかし実際は、過半数の学生 ($N = 280$) が、必要最低限より5000語以上多く読んでいた。

さらに、M-readerの読了語数には、内容に関するクイズに一定の割合以上の正解ができなかった場合、たとえ読了していても記録には残されない。全多読群の、合格したクイズの合計は $N = 2275$ で、合格しなかったクイズ数は $N = 927$ と、実に41%に上る。本稿で分析した読了語数には、これらの、読了はしているが何らかの理由で正答率が低かった語数は含まれていない。これらの考察から、多読群の学生はまさに自律的な学習態度で多読に臨んだと考えられる。

本講座で利用したM-readerは、充実したカンニング防止機能を備え、記録された語数の精度は高い。以上

の読了語数に関する考察を、貸出冊数の多読導入前後の顕著な差を合わせて考えると、英語の自律的学習時間は、多読により大幅に増加したと考えて間違いないだろう。

今回の分析では、貸出冊数の大部分は、多読を成績評定の対象として導入した必修講座受講生(多読群)に帰属していた。これは、教育改革推進事業による他の学年への提案が開始直後であったことを考慮すると、当然とも言える。今後取り組むべき課題である。

4.2 定期的・継続的な多読の促進

多読は、1~2週間に1冊読む時点で最も投資対効果が高いという報告がある(Nation, 2009, p.53)。ところが、筆者のクラスの学生の中には、締切り直前に集中して課題をこなすものも多く見られた。この点は改善の余地がある。筆者の前任校では、これを管理するため、導入時には授業時間を利用して図書館に赴き、現物を手にとって説明したうえで、学生はその場で最初の課題本を選び、多読を開始した。これに加えて、紙のレポートの提出タイミングも管理し、提出のない週が続くと減点等の措置を取った。その結果、読書はかなり定期的に進められ、読書習慣が確立しやすかった。今後は図書館での指導やM-readerを使った同様の工夫を導入することを計画中である。

4.3 速読の発話流暢さに対する効果

授業中に継続評価を行った発話技能では、流暢さと語彙において上達を観察したが、特に流暢さにおける上達は急激な印象があった。発話技能は、4つの下位項目それぞれを4点満点とし、0.5点単位で評価したものを毎週記録していく。ただし、その得点はコンピュータソフト上で上書きしてしまうため、現時点では詳しい数値データでの確認はできない。

筆者の観察では、学生の発話のなめらかさは、次に発話する語彙の検索速度が上がったことに起因する印象を受けた。また、このような現象は、多読のみを行っていた前期には観察できなかった。以上から、多読に加えて速読を行うことで、発話の流暢さに影響を与える可能性が考えられる。実際、速読ではなく多読であれば、Cho and Krashen (1994)がケーススタディを行い、発話技能の上達を報告している。また、多読が読み以外の技能に学習効果を及ぼすという主張はしばしば耳にする。しかしながら、筆者が知る範囲では、「速読」が発話の流暢さを向上することを、しかも仮説検証的に示す報告は見られない。これは今後の課題としたい。

5. 結論

本稿では、薬学部の需要にあった学習法として多読を取り入れるための理論的背景を考察し、その導入と実施の経緯を報告した。実施内容として、学内外各位の積極的な協力を得て、2017年4月以降の2年足らずで、多読用図書2600冊を整備することに成功した。次

に、試用期間を経て、1年次必修英語講座全クラスによる授業内・外での多読学習活動を開始した。また、卒論執筆のために学生が所属する各教室での英語学習に、多読を取り入れることを提案した。

以上の一連のプロジェクトの効果を検証するため、貸出冊数や読了語数、また暫定的に質問紙調査結果を分析した。これらのデータは、多読プロジェクト開始後に、一定レベル以上の学習時間が確保されたことを示した。ただしその効果は、現時点では多読を授業に取り入れた多読群に概ね限定された。その学習は、少なくとも多読群では自律的なものであったことがうかがわれた。また、多読群に属する学生の多くが、特に読みの下位技能において多読による効果を実感した。

総じて多読プロジェクトは、その自律的学習の二つの目的（学習技能と学習時間）のうち、少なくとも学習時間において明らかに向上の効果があったと言えるうえ、技能に関しても向上の可能性が示唆された。また、習熟度に関しては、より直接的な検証は今後の研究に譲るとしても、現時点の内省的データは楽観的な予測を示した。

6. 今後の課題

まず、今回のプロジェクトは、「多読による自律的学習を通じた英語習熟度の向上」が最終目標であった。本稿の分析によると、この目標の達成のためには、多読群以外の読書量を増やし、入学から卒業までの継続的な自律的学習を奨励する環境を整備していく必要が認められる。

そのための方法として、一つは、多読講座終了後の学生が、習得した技能を利用して自律的学習を継続する動機付けとなるよう、その学習をモニターするシステムを設立する必要があるだろう。初年度の試験的多読学習後の学習状況は、筆者の観察した限りでは、多読を継続している学生と、たとえやる気はあっても全く継続していない学生に分かれ、前者は少数である。こういった状況を改善するには、このような動機付けを学習システムに組み込む必要があるだろう。

それと関連して、もう一つの方法は、教育改革推進事業で提案したように、各教室による指導に多読を積極的に取り入れてもらうことである。そのためには、時間をかけて学部全体、特に各教員の理解をさらに深めるよう働きかける必要があるだろう。例えば、全学的な説明会や各種の連絡ツールを利用して、学習方法やその効果に関する情報を定期的に発信することが考えられる。

発信する情報の内容としては、例えば、担当教員の負担がどの程度あるのかと言った点は鍵となるだろう。同様に、上にも述べたように、さらにデータを収集して多読の成果や全体像を把握し、その効果を分かりやすい形で「見える化」して報告することも重要であろう。特に、今後状況が変わって可能になれば、TOEIC

得点の比較分析のような、直接的な方法で習熟度の変化を検証することは、高い説得力を持つと予測できる。

同様に、多読にかかわる学内の各種イベントは、学生が多読活動を促進するのみでなく、活動の存在をアピールする効果も期待できる。現在企画・実践中のイベントの一つは、学生自身による図書の内容紹介である。学生が図書館で多読用図書を借りようとする際、蔵書数の増えた書架の前で選書に戸惑うことが多いと聞き及び、この状況を緩和するために、授業で学生の手書きポップの作成を呼びかけて、優秀作品を書架に掲示していただいた。他にも、図書館主催の多読キャンペーンなども考えられる。

このように、薬学部の英語習熟度向上のためには、今後も引き続き各種の多読活動を展開することにより、多読群のみならず学部全体での多読活動を定着させて、継続的な自律的学習の質と量を高める必要があると考える。

参考文献

- Aitchison, J. (2003). *Words in the mind*. Malden: Blackwell Publishing.
- Cho, K-S, & Krashen, S.D. (1994). Acquisition of vocabulary from the Sweet Valley Kids series: Adult ESL acquisition. *Journal of Reading*, 37(8), 662-667. doi:10.4236/ojml.2015.53023 3
- Coady, J. (1997). L2 vocabulary acquisition through extensive reading. In J. Coady, & T. Huckin (Eds.), *Second language vocabulary Acquisition* (pp. 225-237). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Holec, H. (1979). *Autonomy and foreign language learning*. Strasbourg: Council for Cultural Cooperation.
- Nagy, W.E., & Herman, P.A. (1985). Incidental vs. Instructional Approaches to Increasing Reading Vocabulary. *Educational Perspectives*, 23(1), 16-21. ERIC Number: EJ324393
- Nation, I.S.P. (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nation, I.S.P. (2009). *Teaching ESL/EFL reading and writing*. New York: Routledge.
- Nation, I.S.P., & Macalister, J. (2010). *Language curriculum design*. New York: Routledge.
- Quinn, E., Nation, I.S.P., & Millet, S. (2007). *Asian and Pacific Speed Readings for ESL Learners Twenty passages written at the one thousand word level*. Retrieved from <https://www.victoria.ac.nz/lals/about/staff/publications/paul-nation/Speed-reading-whole.pdf>
- Reeve, J., Jang, H., Carrell, D., Jeon, S., & Barch, J. (2004). Enhancing students' engagement by increasing teachers' autonomy support. *Motivation and Emotion*, 28(2), 147-169. <https://doi.org/10.1023/B:MOEM.0000032312.95499.6f>

謝辞

多読活動の実践にあたり、東京薬科大学、図書館、生命科学学部、薬学部各教室・研究室様、非常勤および常勤英語担当者の先生方並びに各主要出版社様の熱心な協力を賜ったことに、この場を借りて謝意を表します。

付録
読書レポート

_____ 大学 _____ 年度	Course: _____	Extensive reading report
Class _____ St.No. _____ Name _____	/ / /2019	Date/Month/Year
	日 / 月 / 年	
Book title: _____		
Length of the book (word count): _____ words		
Time taken to read through: _____ minutes reading speed: _____ wpm		
New words I learnt:		
What was the story about? Write a brief summary.		
Did you like the story? Why/ Why not?		
Who is/are your favourite character(s)? Why do you like them?		
Next book I want to read:		
Book title: _____		
MadaYuka2019		